





右とく宛

春部

非やうう姿ふ似たり今朝は去  
 園の夜乃とりぬいりやけ物のは  
 女中方尼あそむ集れ先きさ  
 誰う園も保生乃は乃千編  
 際めりううゆいきふおひらけ  
 ぬくりても萌立世話や春れ州  
 梅散て雪後家乃とくさう卯

卷下

翁 晋子 嵐雪 高松 湖春 正秀 桃隣



62.10.30 雲英末雄



英しふ款のきしり 距多 晋子  
 風をくして静とたふる 藤れん 伝風  
 うき恋よ絶えたる 猫の魚喰 文考  
 歳うらまのきりやをき 蝶れ羽 唯然  
 夕言乃ものうきや 風中 旧徳  
 町近し 春もも 糸を粘てうち 沾煙  
 梅咲や 道ゆき ありき 白雲 園女  
 花も今 春よ 櫻くく 覗う那

○其部

夕影や 名狐 為し 多き 集れ 歎 去表  
 村ぬれ 少く けり 小く あり 暑く 柳 音子  
 子を 持し ぬ人 あり とも ぬれ 夕涼 一漁  
 歎乃 おり 白雲 あり ち ば 水 園  
 早し 女や あら 由 春 上の 産 取 超 波  
 明方や 蓮 見ふ 出で 蚊よ 巻き 照 溝  
 蚊 居りの 火 相 冬 あり 帯 許 六

連根恋

我 恋や 只も とも ぬれ 青 花 灯 嵐 雪



とろろと蓮花の出て病るころ  
時を啼くや湘水れりよらる  
あるのぬききよはあつと探れ色  
夕まよふい出さるゆ拍のふ  
空やうらうらと遠くふた郭公  
一天の扇かうらも不こおれ  
涼しりや塚やうはとあつとあ

秋部

名月やあつとぬ井たれあふ村

湖江着  
文村  
嵐雪  
老の女  
百里  
貞依  
支考

敬函

浮草のうれあや女あつと  
うね人をふらとまつとんじ解れ書  
何ぬらとあつとあつと秋の風  
立出て後あつとあつとあつと  
物とあつと橋の名もあつと秋れ雲  
あつとあつと月向うあつとあつと  
かぬのほらあつとあつとあつと  
新月の中あつとあつとあつと  
鶴やあつとあつとあつとあつと

旧徳  
長崎産  
去来  
支考  
嵐雪  
嵐蘭  
桃隣  
白雪  
青磯  
超々



関の娘うゝ人誰來のまゝは書

沾徳

冬部

思ふことの雪とや比は良れ命後

文州

昔も昔も枯叶の目立ちあはし

枳風

あつとゆり垣の結目や初とれ

野坡

門の雪白さうさういめとさ

嵐雪

うゝ〜〜れさ〜〜と集るう鷹の巻

百里

雪の根とゆれとあるゆゆ

おれ

世の中をさうさうはるさうさうさ

上四

小傾城りておぬらん年れ書

晋子

物とさうやあ〜面白うゆり書

鬼貫

冬〜〜やま〜あま〜この風れ也

露斗

徳

裸みらゆ〜きり〜ふり 丸小

翁

祝樹善善の禪陀伽王と對して貪欲  
とさう〜の〜さう〜さう〜の〜  
標始難悦後増若の文れさう

欲

雁癒乃い好るゆ〜さう〜

晋子



逍遙鵬鷄之間出入是非之境

彼是

花の香 此方を留まに盡くあり 嵐雪

出と入との区十八句を予う幼年より

して居るに或は寸切席に花等の

去と来る古人亦は遊と交れ筆をうり

細々と流筆をうり妙の相合徹恭隆

元門等ふゆはる玉を伝き及記

花山と流布あるのかしらよ 光嵐

宿小居てねりし庵より花華盛 夢

宵明れ新面より入るや柳の花 巽我

曇の月や入るあもはつと八王寺 夢

花鳥のそらよよくねきてるるあや 光嵐

郭へ入るは根の掃きぬ ぼ

早し女よ春はまはつて時を 巽我

ねの根よ少くあつとあつと 夢

あつこの花錦うはつとあつとあつと  
てはつとあつとあつとあつとあつと

時鳥とてあつとあつと 左 嵐



ほくき原新乃川系れをるるり  
空あらん女扇松山あふれ月  
後の月世の好月もあうねく  
卯一ついのりまかして梅老著  
春とかりと下ろて松や秋のぬ  
熊坂の長刀あふ家重と夜あふ  
遠えく風をさくくはるるさふ  
神鳥や我理ふふさびたのむ  
乳芽ふ猫の如くはるかささるる

巽我

老嵐

卯一

巽我

卯一

老嵐

卯一

巽我

卯一

下六

○春部

酒如くぬ集れくきあや言のぬ  
と并寺れ錦中く多らる春言ぬ

朱民舎

布誠

雪歌軒

尺

おのろふよ氣のけく花のあはれ  
春くくの花乃年あひ女うゆ  
ほろくく新きて山の熊ふけ  
かうたれ日をもたはるるさあうりぬ

東武

魚貫

白雪

老魚

心海

巽我先生けくくの別巻の辰小浦と







梅咲やあらしもれもさきさき  
時をふくむまじきものなり  
古塚や春のまはるる如し  
我まのつらさをかへて  
いふももつらさ吹く垣根  
豆梅の箱根の海を火燈  
いふももつらさかきかき  
いふももつらさかきかき  
秋は海越えん早苗のゆき  
乙 陰  
金 桃  
稲 起  
麻 任  
文 水  
長 我  
金 下  
蘭 中  
風 和

見残りの昔もつらさ  
みづ月や馬王乃高座より舟  
名月や波うらみ深きす  
朝ふもつらさかきかき  
秋は海越えん早苗のゆき  
乙 陰  
金 桃  
稲 起  
麻 任  
文 水  
長 我  
金 下  
蘭 中  
風 和  
見残りの昔もつらさ  
みづ月や馬王乃高座より舟  
名月や波うらみ深きす  
朝ふもつらさかきかき  
秋は海越えん早苗のゆき  
乙 陰  
金 桃  
稲 起  
麻 任  
文 水  
長 我  
金 下  
蘭 中  
風 和  
見残りの昔もつらさ  
みづ月や馬王乃高座より舟  
名月や波うらみ深きす  
朝ふもつらさかきかき  
秋は海越えん早苗のゆき  
乙 陰  
金 桃  
稲 起  
麻 任  
文 水  
長 我  
金 下  
蘭 中  
風 和

あまのつらさをかきかき

青谷

牙院

貞至

糧風

馬任

九穂



笠吹く漕音も一花の浪

羽白

啼おろせ花のつゆ作夕を暮

雪扇

鞭よする漕舟も里れ舟の足

貞扇

号しう猫も由さしもの移りゆく

東賀

みも来ん五日れ湖乃程遠と

町也

お夜とく舟一葉奪れさうくゆ

鶴丈

うららけと絶し舞身をもてあはさふおと  
られしも時をわすれ

ねよゆく舟より舞葉渡れと花

芳室

浪花

菽垣の中ふはひや梅一葉

桐豆

裁縫のや春と暮との川袷

舎鳳

遠れや町この裏れ紋さうゆ

紫天

妓の裾り吹きてあゆむ舟舟

了雨

虚を借の刺立青き櫛うた

十兩

買花川乃去年を汲せそ言まふ

帯門

家はよみ我は打花の都めね

方衆



山寺をわづめてのこころきけり

北 箕

子の抱たぬもの一里れ山をこ

莖 幣

本塔のやうにて漕ぐりまし舟

乙 粟

暮きぬ人罪のこころ抱

紫 柄

今一冊めて

兼りつる命令なるの一筆篠

福原邑

梅 史

水切るとはまき柳を看るか

富 天

梅抱て柳をそらぬか又抱

志 井

風はるか浪谷道や去れ梅

秋 馬

秋花画巻

嗚や山風乃らふふむら

李 原

寄 中 印

折るえんや春の森の音は人室

貫 麟

賦三系 岸上尾をい

栲之や世の昔は美入

星 行

藤の花や中より浪根れ二柱

日

松島や雪うる人乃人か

日



虎杖やいりきせり飽く人きりし

魚洞

小舟の神も舟へは潮干し

珠松

主志しぬ等れ即宿の松葉也

蟻城

連翹や男じよいり垣のぬ

雪川

句をえけ

梶原よおらもておの波名也

潘山

をねくは柳乃上母初音也

搜石

人乃世とわりあうと去れぬの貴

百柳

るる海の翁ふそれおぼり月

礼川

木の羽じりおろれ松葉也

起足女

山鳥れ合とりこやる菜摘

元澄少年

百姓の家よおろめり木のむ

舟

春のやん松葉よ松小ぬ

文風

時くそききさうしや花の月

巖松

美の足ありて呼りし柳乃婦

嘉晚







庭前乃玉所  
牡丹れ白ひう那

風光  
うらと

空も川も

清き鬼や秋の  
一帯は園のぬりし

可園  
鬼丸

矢と踏くらにこまふや子規  
一ひそ離れ書れ

仙鶴  
貞扇

子規啼く砂とやと并乃明  
耳のつらおとくむや毒れ蜂

東賀  
雲扇

むしほりや

音谷

喜乞の葉と新く草乃月  
とれりや砂ゆられぬる

布門  
莖帯







かーう

五月雨や晴まはりの梅はるる  
蝙蝠や採らるるうづら

淡江  
乳川

山岳

夕暮しのほろろ人あはれ  
晚押やふふ強さあやめ  
月の香るるあはれ牡丹  
空の清くはるるあはれ  
此景と表はれはるるあはれ

分林  
泰成  
起足  
神梅  
升舟

暑きあはれ氷室や月は清里  
夏州や所くはるるあはれ  
彼人のあはれはるるあはれ

福柳  
禪門  
蚊叫

氷室

みる月乃一日をまはるるあはれ

田鶴樹

閑窓

一頻り睡ふはるるあはれ  
寺所を風乃あはれ一  
懺の日

燈足  
右道

佐の江乃あはれあはれ



松の風 淡路へ行く 後集

舎 門

向 梓さあしに 貸て 糶う 柳

沽 耳

あの色いさな 四も 分 繰う 文

雲 道

漱 白く 井も 花や 枝の 白

槐 枝

曇さの 紙を うゆる 漱や 滝の 音

吐 雲

春日明神法集

冬 枯と 一 度より 一 度 若 菜 白

布 門

卯乃 びや 耳 白 毛 子 鹿 角

乃 坊

妹部

拙して 目の 明く 赤 柳や みるく 治

魚 貫

古 塚の あらうと や 虫 けら ねと あり

白 雲

晚 け雪は おとろり あり あり

永 芳

山 里の 風を お 出 せ せ せ

白 海

菟 棚や 陰を 芥り 一 波 巻 上

老 魚

昔子の白とありいかにて角田川  
浮囊屋人ゆりし

名 月や 歌 詠 尋ね 小 角 田 川

鬼 丸

尻 尾を ぬ 尾乃 以 桑や 夕 月

如 雲



編くくじ田ぬぬほしれ今宵の  
元

七夕や暮るるうらもや虹の橋  
舎

又此の後園ぬありは橋よりか遠くは世  
乃のくくぬれをあらもふさくく

ひつらや去年のつらさの  
仙

惜しん書ぬき月も一夜に夜  
半

神々しは時の流やねり人  
雲

粟も脱人きをさうり小袖を  
扇

寐姿れ不二くはくや星は  
東

はたふよも鐘の音の  
町

花の後ぬきをさうり此の音の  
鶴

くくく明か間と痛く此一  
青

月今宵思をさうり此に松の影  
布

名月より眠るるをさうり命の  
方

紙を祇女ゆらう遠く後の月  
北

程流の流乃音遠く夢は  
乙

舞や具負とわくくか歌を  
文

元 舎 仙 半 雲 扇 東 町 鶴 青 布 方 北 乙 文



良夜吟

海を吐くしらや中れ秋津姫  
湯の蓋も吹や女の子并落

芳室  
舎鳳

じとぬふ不控繋もあつ天の川  
後や住未定や月乃ふれ際  
河原の月を誰う織る屋綿

了雨  
嵐角  
十雨

唐乃骨入餅りや唐此片

富天

鶏頭乃毒もぬきけと初ら思  
寂り羽も濱の友よ月夜子  
我秋う却結もしくよ廉れ妻

志井  
寸伽  
秋馬

名月や物男や女の逢えん屏

李原

題遊り女

稲妻や雷の夜と涙のりき

貫儀

八月十日夜騰駒りき山寺よけい法蓮  
ひうのく伊物のさくくとりく

桂男や池のあきよと書り書り

疎松



沃格梗例小野希

城

名月乃春中ノ種キ

雪川

宿てんをこやここの早

樓石

夕々れや踏乃

潘山

其の玉乃こくま

欽斗

草花よ身を洗

猪柳

名くや碎るものは浪の音

舟舟

梶の葉や我名

州山

川と冬を月れ

羅門

菊の香やあ

沾耳

毎多て秋よ

由嵐

月と宵

柳賀

葦や人の

巴麓

紅燐よ

露邑

川風よ

露紅

野州上吉田

日黒羽

日中里河岸

日大沼の岸

日日光今市



新秋や晴まは乃通しうりけ  
名月や西乃庭ぬる流い山  
空知くぬ川又鑑のほり二つ  
苔わつら梅ふ條并れ冷し物  
大佛の道道とあり角力取  
化されくそつらあろや躍り人  
宵明ぬ芝居崩し杭う那  
面白小松乃まきまや後乃月  
寄恨書

全 沾 牛

全 沾 如

全 沾 汰

全 立 調

全 露 什

全 巢 鶴

全 池 厩

全 曉 残

念力れ山家みくあすた那  
きりくくと社政し望いありり

曉残書

常川結城

雁 宕

比多尼寺早もあは舞もあす  
内し請や佛ふ念を打く人鳥

原 松

田 鶴 樹

舞の明を留て

夕影や六の朝影をた方柄杓

ろ 坊

ある色い奥山よりそなれりそある

奥の久ゆ今朝や芳地を方れ波

馬守彦

巴 江



冬部

日光乃雪をともかきて落葉の

黄列

中六夜や雪のまよふ梅小路

露磨

山に踏は白きを後の雪の

白雪

春のよそよそを人の涙とて枯ゆ

永芳

あけぬわく筆はほろりぬる

心海

去秋よふい事とて世路を枯ゆ

魚貫

佛名とて先て年のふれは

棘庵

なすくは涙とてやこれ重なる山

立圃

初雪や人も路とてははる

珠琳

春のよそよそを流りけり水

竿秋

雲よりとてふくまはるるを

仙鶴

又とこれ世の心とて言ひけり

雲扇

初雪の初人ともて言ひけり

貞扇

初雪やいふ世の心とて言ひ

東賀



何人よ何の事とあり初しこれ  
おろおろ七奉神しきさる

町也  
鶴出

さしこれや何人鳴もつ松の種

青谷

古戦場

六條より市等とのこ松野うな

布門

夜よりと家町よ淋きんね月

莖帯

日し輝をさしわくさるに巨燈の

梅史

寺の灯や色かたしと物尾紫

富夫

臘月の吟

鳴おし谷れえあし松乃也

寸伽

神守りきし子を呼裡の如

秋馬

玉造らるる系

時ゆやけふくさるる入口か今

了雨

科と耳坐釋し破る雪れ者

十雨

福前奉納

うねぬさくふりさゆふあはれ

堂原



新故交換之詞

是非を知る人其師之れ抑也

何笑し睡る山落葉其の花

煤掃や多しとふ人を忍守

南~~年~~一~~れ~~おさまる毒れ社也

あま~~り~~や~~す~~物~~を~~あ~~の~~物

遠~~う~~つ~~の~~風~~れ~~あ~~や~~六~~つ~~り~~じ~~

岸~~の~~積~~と~~里~~を~~身~~の~~入~~る~~き~~を~~

之洞

蟻

減

潘山

雪川

搜石

百郷

舍風

碕陽枚中長~~の~~つ~~つ~~と~~と~~

わ~~の~~り~~の~~や~~神~~定~~る~~つ~~つ~~に~~岸~~の~~と~~

七種~~は~~ハ~~る~~ん~~と~~あ~~れ~~や~~所~~を~~中~~

う~~か~~れ~~を~~れ~~若~~り~~や~~和~~音~~れ~~浪~~潮

あ~~り~~て~~来~~る~~精~~ふ~~あ~~れ~~は~~は~~暖~~る<sup>ヌク</sup>

風~~や~~障~~子~~一~~年~~を~~玉~~手~~箱~~

寐~~ぬ~~人~~み~~鳴~~く~~や~~板~~家~~れ~~さ~~よ~~を~~れ~~

烟足

沾耳

猪柳

禪門

虫叫

田鶴樹



歌仙

先師の秀逸ありは神の白く眼こく  
あつて命しつゝ問れり事くさつては  
まづうせれとせむこと捨てて歌仙とあり

明早れ枝しよふうりか養う那

先 嵐

竹の子守り一羊曲れ月

ろ 坊

論しあふらるる流擧の古歌りく

萩 洲

帯の人とほふふをまの

逸 明

大粒ぬ較きやういし行いねる

松 架

いれうしつゝあつてはあつて

執 集

うかれきりぬこしをばあつて

巴 江

清山うと欠い牛玉物ふせ

萩 例

志くかゝる重きう上れ寄り傘

ろ 坊

眼境れよすつての遠消え

逸 明

長竿ふ天宮をわし系流は場

松 架

威の竹うはくませぬ廉

巴 江

きよれ月あられちぬしきよる

逸 明

とよみしつゝあつてはあつて

ろ 坊

欠しの中を握るじりり

松 架



高しうららん武吉丸腰  
海へあるやも花舞山あらし  
耳味のぬるやもはるほしうら  
乾湖や作古さるぬの遠も病  
多しきよりや合ふも味香  
何根終り松取越へくわ  
祝知しに病深の意多  
弁一は丸花いりつては身乃色  
明はまは清なるよき

萩 例  
巴 江  
逸 明  
乃 切  
松 架  
萩 洲  
巴 江  
逸 明  
乃 切

おのゝ名のわねまぬらのおき場  
霜降の中とらうた月代  
豆腐うもくき世の思をわらう  
きうやわくや早うらん  
氣遠くは煙気がくして後の月  
夢も枯れては杖も書ぬる  
初春より近き冬風の柳うら  
布袋の氣とくやあがる  
相湯乃もらうはかろの地うら

松 架  
萩 例  
乃 切  
巴 江  
逸 明  
乃 切  
松 架  
萩 洲  
巴 江  
逸 明  
乃 切



山のふかき法名を知り  
まろ日れをくもぬりけよ花のそ  
人まあふり乃垂しおるま

荻 削  
松 架  
逸 明

歌仙

又行ろ葉葉もゆりて江戸橋  
空らぬまこのさくく下氷  
ハミヤとくみふ葉也ゆりてさく  
まれ刻いといれし淋しき  
冬の上あやゆり月夜

羅 人  
馬 坊  
青 水  
貞 室  
全 志

おろくくおまふ屋は陰しん  
風下実のそくろ波程ゆく危  
物を騎下ぬある湯女  
振り袖をぬれしら笠おしき  
あいらりまてるはさふ糸  
借さぬ氣のひらきまよぬれぬ  
雪散る言ふ子のほく飛り  
舟あろりぬれりし傍の袖  
柳のしきも日湯のまき芭

青 谷  
乃 切  
羅 人  
貞 至  
全 志  
青 谷  
乃 切  
羅 人  
貞 至



心わつる夢を梳せて鶴守

全志

月の中へ入るは其日

青谷

井くけりたるは若菜村の草

貞至

万葉のまきし西宮の色

羅人

常のまきし西宮の色

ろ切

一書と書ふ古ゆりの神

全志

四の南ふか布て出合川とて執

青谷

代矢作し世児の錦本

貞至

六月に野を林の野へ海近し

羅人

二荒籠波虹のまきし

ろ切

四しきき梅や柳を根まで

全志

又字讀子の伯父なりし見え

青谷

恒古も花玉の清首踏まはり

貞至

大即やかきるよふに物切

全志

けきのあつるは福ぞうしを切

羅人

踏山崩しきくさむかき肌

ろ切

清く厚くしきくさむかき肌

青谷

深砂粉を人婦のあはれ衣

貞至



初見小波の波こころの月をねや  
又送る流るる人志する火の  
橋よとくくめめ那ふ毒れ新  
車伝せりてきこつたのき

羅人  
青谷  
ろ地  
全志

歌仙

咲音やももとあつて見山さう  
あーらと滝はあ若と滝は様  
河よよも春よかく海神を  
写してあつるねつとあり

茅室  
茅原  
ろ切  
茅室

月の空窓より借るおろ小冬  
霧よ霧よねて秋の苦さよ  
やもとと籠き切てあつては深  
日一秋いと代このまらふ  
玉中けりてをさるるもなうみ  
あつこの舟と追つたを  
風吹もはあもあらむと時行ま  
人冬水くさり秋也てを  
鈴よ音も捨ぬあはれものね

ろ切  
執筆  
茅原  
全  
芳室  
全  
ろ切  
全  
李系



濁世の如く石流は日あり

全

初あ〜〜あうてう〜〜の如くあり

芳室

僧の七うも秋をさるる全

全

中よ者へ毎と毎〜〜の如くあり

ろ河

ちよあ〜〜あよ〜〜行耳

全

あつ〜〜あれき青紙の鏡指の

李原

捨本小埋きさるるや如く

全

板捨箱〜〜の如くあ神乃占

芳室

出〜〜の如くあを侍の如く

全

朝虹乃の如くあて流とゆやの如

ろ河

石割初尚十日路の如

全

残て冷い湯〜〜の如くあ

李原

能情の〜〜の如くあ

全

高きれ〜〜の如くあ

芳室

赤桃花〜〜の如くあ

全

接縁〜〜の如くあ

ろ河

瘡の道〜〜の如くあ

全

雨乞〜〜の如くあ

李原



旅理まののゆしりやん

全

短絡の中をわらうく唐表具

芳室

おえ袴より名不たれ

全

まこと家のちるくは舞う花乃書

李原

雪花れふ風中のゆめく

ろ坊

歌仙

嘗は鷹のゆりよひ日あ那

巽我

お茶明ものぬいこの帯

白雪

まこと若いあねもふと笑をれく

園馬

桜樹へりうる人よやうも

和関

あらくあく古日の月毛戸口新

片舟

酒うらぬらふ花る初杖

春羅

躍のの毛さくしほそくく神乃女

昌華

氣うへるよれ波を待あ

星川

新ふい由緒もつとを瓜踏ま

舎郁

道具んふふと腹も虫か

鳳林

下跡まふふ及ふあゆを凍るる

叙奥

連形もせねと守り八開

鹿友



社をよみしりていさよやふき所

執筆

昨をよみしりていさよやふき所

昌花

四入日ハ仲より花を破へく

和園

ういぬ候てあつて風呂お

片舟

蝶をれを今やと古中うとやれ

鳳林

花をうらうとやれをかく

叙奥

七つとてわりのとらう長閑さう

春羅

市の長者れ牛の歌う

鳥

盃の場されと果ぬに惚くから

星川

形よりお候よはる唐物

鳥

たもつ側て悪景を乃十八九

昌華

寺中れ余間を蝶のうた

舎廊

おと水名を問う杯の白髪を

春羅

くち云くくは天の橋を

和雪

瓢さく作まは花と蜂を吸ひ

星川

浪く友の意地をさむ

鹿友

振舞乃とりを月れ庭のあり

執筆

拾てよふ相もはる葉のき

執筆



麻呂移すあつめそのつ初人  
静い暮しのまじ世を宛界  
大名を何ふとく決をたれい  
二日の向う離れ名跡  
富貴をとう天氣に花相象  
けふはのくび草の浦く

片舟 叙奥 舎都 園鳥 和園 風林

花の盛ぬるあつめそのつ初人  
まじ世を宛界  
大名を何ふとく決をたれい  
二日の向う離れ名跡  
富貴をとう天氣に花相象  
けふはのくび草の浦く

仲をよめし私をばきし初花界  
静い暮しのまじ世を宛界  
大名を何ふとく決をたれい  
二日の向う離れ名跡  
富貴をとう天氣に花相象  
けふはのくび草の浦く

松架 巴江 逸明 松架 逸明 巴江 松架 逸明 巴江 松架 逸明 巴江 松架 逸明 巴江



酒のこけりもさるるもさるる

松 架

長く〜新曲宿り町別當

巴 江

鬼の年れ育つ枝文豆

逸 明

あつ〜男にち移りも〜す御座

松 架

脚巻いとほ法姫様露

巽 我

よ〜入まふ津下隔の妍あ〜よ

逸 明

明をさぬまき〜粒ひ細り

巴 江

あ〜あ〜月乃慕れさ〜川

巽 我

あ〜あ〜木の日あ〜あ〜巫女石

松 架

感〜を添庵はあ〜の春れ着

巴 江

白物〜孫と宮の治り情

逸 明

迹付ぬ風〜深雪れ山あ〜に

松 架

鬼〜登〜夏の心中

巽 我

あ〜の邪〜あ〜のい〜

逸 明

朝粧〜と〜魚買ぬ門

巴 江

張合〜取〜佐〜角力村

巽 我

あ〜あ〜月小あ〜山

逸 明

あ〜あ〜や二人坊〜の秋の風

巴 江



あはれはくしのよみ大丘  
時多十存の申を神へ付一  
是を夕夜をうおき也  
宿りてはくしに星をこぼる池  
二十日の為習ふ来ていぼるま  
まげの基い人ふゆせて勝る付  
世間の京と物喰とある  
うねりも花の路は月夜に  
おもしろい余のま風

松 祭  
巽 我  
透 明  
巴 江  
松 祭  
巴 江  
巽 我  
松 祭

秋仙

衣子と山の妻やをこり権  
澄りし里に鳥をはと日  
橋の沖涼し月月の漕出く  
あけ人まねも何れも笑和と  
宿貴を所鄰よゆあぬ回りま  
悲しうてあを背も感とる  
嘆くぬのい殿と分浪のまは丹  
帝子う強いのいあを極よんえ

舒 嘯  
巽 我  
鬼 翁  
厚 根  
素 線  
檜 影  
張 嘲  
嘆 古



膏麦切ち精口こらぬしうえなる

猪文

さうい入おぬし小山寺

昌渡

石葉ぬの田の暖ふと三日の月

厚根

物まの栂中しうく糖

舒嘯

給もよしの世活ぬく若葉と卯

栂薪

風小神紫れた鼓中ゆる

兔翁

雪けちるゆし小路のそもがりとれと

嘯古

暮るよへみる瀬流る舌の根

素線

花冬く餘さぬし麦をそきて見る

張目

佛と折ふ村の如月

猪八

小神ゆき木綿しを長くゆき祝

昌渡

きつねの絶ぬ若葉れ海は

厚根

検校も出入り嘯をこゑて行く

舒嘯

け雪さるは明日もまねる

栂薪

仕合紙背の宮津の市ゆる

兔翁

そハヤうしれぬし物侍

嘯古

そく音うと祝ち池子を打ける

素線

さいふ髪の多し越後屋

張胡



さきさきと霞の月が孤ぼくを  
びして暮らさるる秋は風船  
舟の幸もさきさきに麦も冷とて  
やうき家の一い城の御母如  
ふふと吸ふも店乃二方とて坊り  
刈灯も園の明もついで  
津義もさき思の付もついで  
去年の儲てりみ一丈  
咲た乃公波手り蝶とたり

舒喃  
猪矢  
昌渡  
厚根  
梅影  
猪矢  
曉古  
張胡  
素徳

系うのゆかりとて書柳

鬼

歌仙

盆の頭ふあうも紅花ふう如  
鬼を志して屋の草花の友  
忌川又月書詩の類うし  
舟川と水色の濁り  
石垣を絶てあはれも百姓家  
おろし一場を嵐さむ  
雪宮と尋あそびと浪塚の奥

其湖  
藝我  
柳里  
淇竹  
巨江  
執筆  
淇竹



朝の文窓の青い荷がみ

其 湖

春くろく名やあやしく杖の独り言

梅 里

田植のしるし通玉章

巨 江

典業の有りて出入る何れも

其 湖

好ふよの如い星の小座

淇 竹

月あふにせいで草履と女帯花

巨 江

おさゆり虫の襟の飛はく

梅 里

あつたを茶を好ふ家れはく

淇 竹

計久宿の少張の浪者

其 湖

お枝よえ日雪れ華あけ

梅 里

貝よあふるにさくさく

巨 江

新春の同紙教衣紋

其 湖

顔よあふるにさくさく

淇 竹

お島を何ぞ同く

巨 江

むしと何ぞお家り

葵 我

世の中や旅とあふいの若浪者

梅 里

淡乃ま帰良薬れ香

其 湖

初深雪物見合ひは日

淇 竹



忍草とてわづらふ人ぞも海の  
田の中より竹うまれて浪を張  
とと名も呼ぶ亀の甲村  
舞うく疾る中より一に露をん嶽  
空よりととてとて春より種乃花  
納まれば卯より地元のまゝん  
彦留のようたこ初も和く  
ゆゑの家の天井板乃節の元  
後州立日の長よるを移る

巨江 其 巽 巨 梅 淇 淇  
江 洲 我 江 里 竹 竹

名月のつぼみ花のうき様  
此のよよ心弘いよと花

其 梅  
洲 里

五十韻

二百十日乃風はなりしと

降る柳風のよもぬし秋乃色  
矢もひし菊しゆはり秋  
稲虫乃泣くよもひりし

其 巽 公  
水 我 公



鳥のうらやまの面はふたつ一  
胸算れ着る少のほほの飛指圖  
豊のゆる夜いあをゆるる雪  
長つれとえれあ餘のあまの  
飛脚もくねい側の絆  
細引乃中に大字を魚も乃  
とつしるるふゆるむ掛  
あつしるる男れ顔よ氣はあし  
然と利とる中暮とぬい勢所

官水  
全  
巽我  
全  
友  
全  
巽我  
官水

竿形よ折てあるなりあ針  
算根の園みあつた言  
竿根の曾我乃折りし只拜  
乃あよんゆるさつと屋の毎  
運香の膽み配く日日月  
側るああぬよるあやあさき  
我たえ人あはらせして華めり  
舞のあまの箱のゆるは初は  
とちの印しし線が氷のこ

全  
巽我  
官水  
全  
巽我  
官水  
全  
巽我  
官水



和泉、いと常陸、かきこゝへ

巽 秋

旅風宿も宮古れものかきり

全

あ、他の来る果も煙田

官 水

と、い柳、霧り、反、と、羽、り、あ

全

老、ら、と、都、ら、い、山、門、の、顔

巽 秋

舞、よ、て、病、る、書、を、鳥、の、か、ら、よ、て

全

あ、よ、ぬ、る、書、比、い、暮、る、は、情

友 水

行、く、と、河、内、は、神、の、一、の、い、位

全

和、の、答、を、あ、り、け、る、馬

巽 秋

軍用、ぬ、片、う、い、の、花、一、は、美、儀

巽 秋

瓦、多、天、窓、て、細、所、を、く、ぬ、り

官 水

初、物、を、送、る、も、奴、乃、欲、あ、初

全

と、心、か、の、町、を、籠、り、虫、れ、音

巽 秋

月、と、宵、早、の、山、と、ま、い、山、麓、腰

全

書、い、む、一、の、皆、さ、い、秋

官 水

念、力、の、こ、い、い、し、り、厚、を、さ、う、と、あり

全

あ、い、く、と、夜、の、娘、目、を、あ、り

巽 秋

爪、小、物、酒、を、羽、籠、り、次、郎、を、て

全



瀬戸の波もよみよみ

官水

冬もよみよみの紀乃路の冬籠

今

猿の毛もよみよみ

集我

子頃呼ぶ幾度とある村若松

今

天水桶乃編劍系音

友多

弁席もよみよみ

今

笠編もよみよみ

巽我

袋籠の糸もよみよみ

今

久宿もよみよみ

友多

東中い花の籠乃和風日和

今

正月二月三月の沙

巽我

表まけ音い降もよみよみ

この頃の山嵐月夜浪よみよみ

明き門もよみよみ

初ねもよみよみ

一考れ糸乃研乃ほもよみよみ

透明

野中の池れ杜もよみよみ

有城

ゆもよみよみのまもよみよみ

鬼丸



弾心多つと十六のて ち切

是より 牛の雪

年や孕む 牝柳

雪 遠く 立花の柳



### 友雀跋

雪路残場の孫糸糸をる友雀は四方  
の宿はは糸雀糸糸ありに臨應純  
徳とまは白雀糸糸ありに次す穂火  
季子秋小海糸糸ありに情の雀糸糸  
何にに晋子一派の戲場を設けあそ  
同調異音糸糸ありに古風と様  
糸糸をに百載の存糸糸も躍り忘



世の心支雀哉此の心を憐門少の事  
おぼりには日京師ふあつとまきつるに  
たふ人成音歌とまき進ハ小雀實雀の  
列次なるく年くち被ふりちかしく  
花ふ思り月ふ磨をえヨソホヒ雑於るを  
追飛そに輕川く程よりと極の末に  
ぬ寝声ありとあ也感物珍志つる情  
くち非情ふ入るま長法を凝して五雅

浅得令也オホ雀翻舞し白雀感  
存心時なるは治世の心を感ふ、この  
学あ足の踏をたふは去るあつて洛乃  
巧心平クドキ雨田同字のそとよふアのそと平ハ  
若入口の雀あまあつこの心を固辭出デグススミ  
せよと強ふゆるまき舞ハ扇を挿取  
し頃あつちちちのぬまて正候  
成観ふ人無心くしと成たふ



古今事考元編  
昔 寛保三年丁亥夷則上流  
維舟三世浪華西編  
臨江志

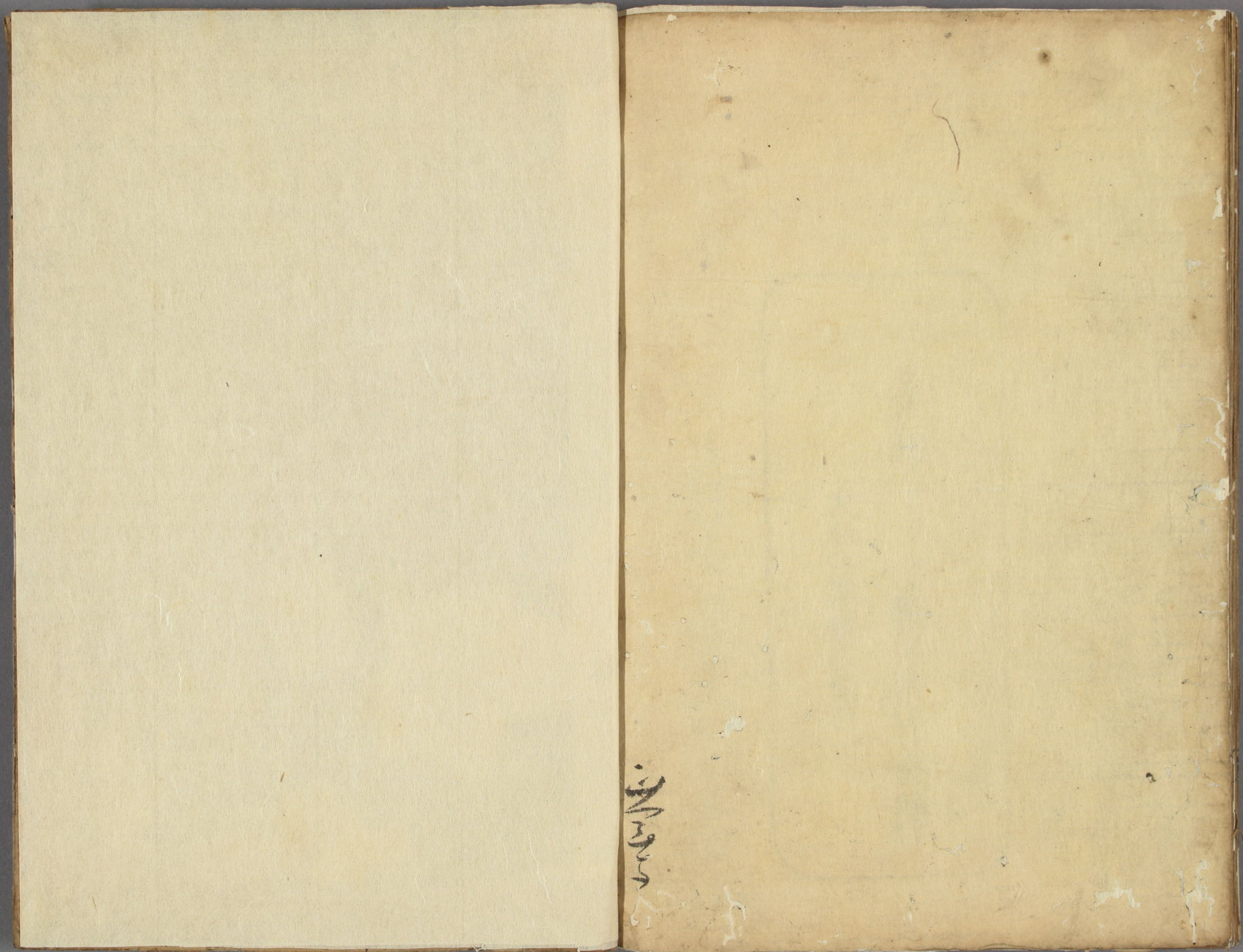
日列高十德正念寺物

書林

大坂心齋橋順慶町

涉川清右衛門





11



